

## 設立六十周年を祝して

昭島市自治会連合会 会長 小野正敏

設立六十周年おめでとうございます。

終戦の混乱から完全には立ち直っていない、昭和二五年に上拝島自治会としてスタートして六十年、現在では拝島駅前自治会として会員数七〇〇世帯を数え、昭島市でも大きな自治会として地域の生活環境改善、地域の活性化に取り組んでいます。

最近では、拝島駅南口の再開発、周辺道路の整備、大型スーパー、大型病院の進出、大型マンションの建設等により「まち」が大きく変わりつつある中で、六十年の伝統と文化を守りながら、防災を自治会活動の中心に置きすばらしい成果をあげておられます。

さて、本年スタートして数ヶ月しか経っていませんが、ハイチ、チリで大きな自然災害が続いていますし、私たちの住んでいる東京でも、近い将来直下型の大きな地震に襲われる確率が大きくなってきていると言われていています。

また、昭島市においても少子高齢化は着実に進んでおり、災害時に援護を必要とされる会員、地域による見守りを必要とする会員の数が増加していくと予測されますので、これからの自治会活動に「安全・安心のための共助体制の確立」を最重要課題として加えていく事が大切であると考えます。

地域のつながりが薄くなっているといわれている昨今、地域に強力な安全安心の共助体制を築き上げていくのは簡単なことではありません。

即ち、新しい多様な価値観を持った、他人には干渉したくない、他人から干渉されたくないとの個人主義を尊ぶニューファミリーが増加していくことにより、地域における人と人とのつながりの大切さと地域の伝統を守っていくことの重要性を軽視する傾向が強くなってきています。

大きな災害が発生したとき、一番必要とされるのは地域の人々の強いつながりであり、これをベースにした自治会のリーダーシップによる共助体制です。

不幸にして、災害により自宅が住めない状態になったときには、当然短い期間、避難所で生活しなければなりません。避難所で毎日発生するであろうトラブルに対する対応、大切な水、食料をはじめ援助物資の配分についても自治会のリーダーシップと地域の人々のつながりを利用することによりうまくマネージしていかなければ、避難所での生活は辛いことになってしまいます。

あまり危機感をあおるのは良くないと思いますが、阪神・淡路震災のとき、被災した人の八十パーセントは地域の人によって救助されたと言われています。

災害時に一番頼りなるのは、地域の人々の強いつながりをベースにした共助

体制です。言い換えれば向こう三軒両隣による共助体制が重要です。

多様な異なる価値観を持つ、世代間を越えた強い地域の人をつながりを作り上げていくことが、これからの自治会の大切な役割だと確信しています。

強いつながりが出来れば、防災活動も、見守り活動もうまく行き「安全安心まちづくり」もうまくいけると思います。

「人と人をつなぐは一日にして成らず」で、これからもつながりを強める活動を重ね、災害に強い地域力を作り上げて行ってください。

拝島駅前自治会のさらなる発展を祈念いたします。